



学位申請者 今井 典子

論文名 *The Effects of Implementing a Dictogloss After a Task Activity in Developing Practical English Abilities of Japanese Learners of English*

### 結論

今井典子氏から提出された博士学位請求論文 *The Effects of Implementing a Dictogloss After a Task Activity in Developing Practical English Abilities of Japanese Learners of English* について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は高島英幸を主査に、副査として、根岸雅史教授、吉富朝子教授、望月圭子教授に、外部より松沢伸二教授（新潟大学）を加えた5名で構成された。

### 論文の概要

本論文は、外国語学習者の最大の問題である、学習した文法などの言語知識を実際の場面で運用できないという問題、inert knowledge problem に対処するために、欧米諸国などで広く援用されている「タスクを中心とした言語教育 (Task-Based Language Teaching)」の考えに基づき、日本や韓国などの「英語を外国語として学習している環境 (English as a Foreign Language)」を考慮した効果的・効率的な指導法を探り授業改善を図ろうとするものである。

とりわけ、意味・内容の伝達を中心とし、同時に、特定の文法構造や言語的特徴を引き出すように工夫されている focused task の「タスク活動 (Task Activity: TA)」に dictogloss の活動を連動させ、その有効性を実証的に明らかにした、第二言語習得理論に基づいた英語による研究論文である。

第1章で、言語学習者の inert knowledge problem に言及し、当該問題の解決を図るための具体的なアプローチとして、特定の文法構造に焦点化して指導を行う form-focused instruction (FFI) を取り上げている。なかでも、学習者に「コミュニケーションをさせ

ながら、同時に、コミュニケーションを行った際に生じる文法などの誤りに限り言語形式に注意を向けさせる指導」である focus-on-form (FonF) と、「あらかじめ選定された文法項目に焦点化して学習させる文法形式を中心とした指導」である focus-on-forms (FonFs) の両者と、学校教育で一般的に行われている「教材の提示、練習、使用」という Presentation-Practice-Production (3Ps あるいは PPP) を最も効果的、かつ効率的に結びつけるアプローチを探り、その可能性をそれらの特徴とともに論じている。

第2章では、言語運用の機会の提供の重要性と、第1章で取り上げた inert knowledge problem を解決するための具体的な言語活動として「タスク」を取り上げ、その定義、分類をしている。加えて、言語を発話 (output) することの重要性、必要性、それによる「相互作用 (interaction)」や「意味のやり取り (negotiation of meaning)」, 自分には何が言えて何が言えないのかへの「気づき (noticing)」などの特徴に着目している。特に、特定の文法構造を使用させながらコミュニケーションを行わせるタスク活動 (TA) と、聞いた英語をまとめる際に特定の文法構造に焦点化させる dictogloss に共通した特徴、および、それぞれに特化した特徴に触れ、言語習得との関連を論じている。これらを踏まえて、タスク活動の機会を与えられても、学習者は自らの言語知識を用いて正確かつ適切な英語表現を選択している保証はなく、学習者自身、あるいは、学習者同士で表現の間違いに気づかせ修正させるフィードバックの機会を設けることの重要性と、そのための指導方法の開発が急務であると問題提起している。その解決策として、タスク活動後の通常のフィードバックに加え、英文をまとめる段階で、ある特定の文法項目を用いて完成させなくてはならず学習者の統語処理およびメタ認知能力が要求される dictogloss の活動を取り上げている。その際に、「タスク活動の後に dictogloss を実施すること」の順序性に言及している。このタスク活動と dictogloss の組み合わせ、およびその順序性への着目は、本研究の最大の特色である。

第3章では、「タスク活動後に dictogloss を実施する方が、dictogloss 後にタスク活動を実施する場合、あるいは、タスク活動後に文法練習問題を実施する場合と比較し、特定の文法項目の生徒の理解を高めるのに有効である」、「タスク活動後に dictogloss を実施する方が、dictogloss 後にタスク活動を実施する場合、あるいは、タスク活動後に文法練習問題を実施する場合と比較し、生徒の発話における正確さや流暢さを高めるのに有効である」の2つの仮説の検証を行っている。これまでの今井氏による先行研究を踏まえ、データの信頼性を高めるために、同学年 (工業高等専門学校1年生) およそ160名を対象とし、2つの検証授業 (検証授業 I・II) を1年間に実施している。検証授業で取り上げた文法項目は、文献やデータなどを基に、日本人学習者にとって習得が困難とされる「現在完了形」と「後置修飾」である。加えて、dictogloss そのものの有効性を「受け身」を目標文法項目として、検証授業 (検証授業 III) として実施している。実証研究では、200

余名を対象に Pilot Study を実施し、テスト問題の項目弁別力指数 (DISC) を考慮するなど、問題の精査を試み、綿密に計画している。検証授業 I・II のそれぞれにおいて、文法テストとスピーキングテストを実施し、検証授業 III においては、文法テストの結果を詳細にまとめている。

第 4 章では、第 3 章で得られた実証研究の結果を、仮説とともに検証し、タスク活動に dictogloss の活動を連動させることの有効性が統計データを基に、先に述べた特徴と関連付けながら論じている。文法テスト結果の考察では、タスク活動という現実的な言語使用を体験させることで、言いたくても言えなかったことに気づく (noticing a hole) ことや、通常でのフィードバックを通して学習者の中間言語 (interlanguage) と目標言語 (target language) との差に気づく (noticing a gap) ことができ、その後、dictogloss の活動を通して明示的な言語形式の「認知比較 (cognitive comparison)」を行うことで、目標文法項目に関して深い理解がなされ定着につながったものと考えられると分析している。スピーキングテストにおける「正確さ」においても文法テストと同様のことが考えられると述べている。

第 5 章では、「タスク活動の後に dictogloss を実施することにより、特定の文法項目の生徒の理解を促進し、生徒の発話における正確さを高めるのに有効である」ことが検証授業により明らかにされたことから、学校教育現場に TA-Dictogloss-Supported Language Teaching を組み入れる指導法を提案している。この指導法により、学習者が「ことばの学習者 (a language learner)」から、コミュニケーションを可能とする「ことばの使い手 (a language user)」になることができると主張している。一つのアプローチとして、FonFs と FonF を対峙的な手法として捉えず、それらを、日本で一般的に行われている 3Ps の指導手順に融合させた指導法が可能であることを具体的に説明している。また、日本での言語学習の大きな課題の一つである学習者の興味・関心や動機づけの観点からも今井氏の説く TA-Dictogloss-Supported Language Teaching の学校教育現場への導入の有効性を、活動に対する生徒のアンケート結果や感想などから分析している。そして、この指導法を実際に行うにあたって、「計画・指導と学習」のサイクルを挙げ、指導の際の評価の観点にも言及を広げ、検証結果は広く外国語教育に貢献できることを実証的に証明したと述べている。

#### 審査の概要及び評価

審査委員より高い評価を与えられたのは、以下の 4 点である。

① 第二言語習得理論を踏まえ、「英語を外国語として学習している環境」における指導法を理論と実践の両面から具体的に開発・提案し、英語教育学における先駆的な研究となっていること

② 調査方法において、200 余名の学習者を対象とした Pilot Study を本研究の調査前に行い、テスト問題に修正を施し信頼度を十分に高め、分散分析や効果量などの統計処理を施し、量的な分析を適切に行い仮説を検証したこと

③ およそ 160 名の学習者を対象として筆記試験のみならず、2 種類の発話データに基づく調査を行い、学習者の 5～10 分に及ぶ英語による発話をすべて書き起こし分析の対象とし、学習者の英語力を多面的に捉えたこと

④ 学習者全員にアンケート調査を実施し、仮説の検証を量的のみならず、生徒の言語活動に対するフィードバックなど、質的な観点からもまとめ、TA-Dictogloss-Supported Language Teaching の有効性を示し、中・高等学校の教員にも利用可能となる形式で提案していること

各委員とフロアから出された主な意見・疑問とその回答は以下の通りである。

(1) 本研究では inert knowledge problem を解決するためスピーキングテストにおける正確さの観点から、現在完了形、後置修飾を分析の対象とし error-free unit を用いて分析としている。この指標は、これらの二つの文法構造を含んだ節を対象とした正確さなのかが明確でないため、実際のデータについての説明を求められた。また、タスク活動 (TA) に練習問題を行った活動のグループが、他の二つの言語活動を行ったグループより成績が悪いのは、練習問題に問題があったのではないかとの質問がなされた。

前者の質問に対して、学習者の発話をすべて書き起こしており、学習者の当該文法構造の正しさも含まれた error-free unit であること。後者の質問に対しては、今回は、練習問題の効果が目的ではないためによし悪しは判断できないが、練習問題を行ったグループでは、問題を解くことのみが要求されるのに対して、dictogloss を行ったグループは、認知比較を行いながら英文をまとめ、ペアでメタ言語を使い活動を行っている。まさに、本研究の狙いであるタスク活動と dictogloss を実施したことによる有効性が差となって現れているとの回答を得た。

(2) 現在完了形が日本語の概念にはないと書かれてあるが、日本語にもテンスとアスペクトという文法範疇に及ぶ形式があり、また、英語に存在しない受け身の例として「被害の受け身 (迷惑受け身文)」が例として挙げられ、一般的な概念として存在する「直接受け身文」ではどのように考えているのかの質問が出された。

これに対して、学校文法では、現在完了を現在完了「時制」と扱っているため「時制」としたこと、また、受け身文に関しては、母語 (日本語) の影響を受け、英語が正しく産出できないことがあるが、論文では、そのもっとも顕著な例として「迷惑受け身文」を海外文献に基づき提示し、説明したとの回答を得た。

(3) 仮説にタスク活動の後に dictogloss をするという順序が述べられているが、この順

序性の根拠について、また、調査の成績が検証授業直後の post-test の結果（即時的効果）より delayed post-test の結果（持続的効果）の方が高くなっている理由が論文中に十分述べられていない事から、その説明を求められた。

これに対して、順序性については、タスク活動の効果は多くの実証研究がなされていることから、目標とされた文法構造の定着を補い強化する目的で学習者のレベルに見合った dictogloss を行ったこと、加えて、先に話す活動を実施し、言いたくても言えなかったことなどに気づかせた後で、文字による活動である dictogloss を通して確認することでの効果を狙ったとの説明があった。検証授業後、指導なしでもさらに成績が伸びたことに関しては、両活動を行った事による「相乗効果」と考えられるとの見解を示した。

- (4) 調査対象となった生徒の背景知識、平素の授業や活動の内容についての情報の提供、また、調査に使用された dictogloss の英語に不自然さがあると思われるが、英語母語話者にチェックしてもらったかどうかの確認、調査の結果が正確性は伸びたが流暢さに伸びが見られなかった理由、さらに、今後行うとしたら、どのような質的な分析をするかについての質問があった。

これらに対して、被験者は工業高等専門学校生であり、クラス分けに関しても入試の成績でおおよそ成績が均等になるように分割されていること、調査問題の dictogloss の英文は3人（2人のアメリカ人と1人のイギリス人）によるチェックがなされており、調査問題としては、不自然さはないこと、流暢さについては、正確性のように知識を得ることで差が見えるものと異なり、一度の活動でグループ間に差が見られるような流暢さは考えられず、学校現場での継続的な活動の取り組みが必要であるとの説明があった。今後のさらなる質的分析は、例えば上位、中位、下位に分けて、書き起こしされた同一の生徒の英語の違いを比較検討することが可能であるとの回答を得た。

以上、各委員からの疑問や意見については、極めて明確に応答ができており、今後の研究の方向性を意識している点も研究者として高く評価された。本研究は、実践的で現場の状況を踏まえた、緻密なデータを基に、理論と実践が結びついた研究論文であり、理解しやすい英文でよく推敲されており、研究分野に対する貢献もまた高く評価された。

審査委員会は全員一致して、この研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。